

The Occult Elements in Thomas Hardy : In the Case of His Short Stories

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/5237

Thomas Hardy における呪術的要素

— 短篇小説の場合 —

藤 田 繁

「呪術」によって私の意味するところは、OEDの‘occult’の語義全体とほぼ一致する。しかし、そこに更に‘witchcraft’や‘myth’や‘superstition’のある部分をも内包したものと考えていただきたい。キリスト教と対立する、時には補足していると思われる、秘儀的な隠れた領域という輪郭のあいまいな部分がこの概念の中心になろうかと思う。

私の意図は、Hardyの短篇小説、詩をこの視点より考察した後、主要長篇小説のあるものの全体の構図をこれまでの考えと全く異なった風景として捉えること、及び部分の意味に全く新しい光ないしX線を照射することである。本論文では、そのうちの短篇小説をとりあげて、Hardyに特徴的な呪術的要素を示したいと思う。

Desmond Hawkins氏は、*Hardy at Home*の14章‘Superstition and Witchcraft’で、その実例として、短篇では‘The Superstitious Man’s Story’と‘The Withered Arm’の二編を採りあげ、とりわけ後者は作品の全部を収録したいぐらいだと言っている。¹

確かにその通りで、この作品はwitchcraftが前面に出て、しかも作品全体を支配していることは誰が見ても歴然としている。従って、この作品をその方面から論じて、なんの発見にもならない。がしかし、典型的なこの‘witchcraft’を整理しておくことは、Hardyの隠れた呪術的要素を解析するのに必要な手続である。

この作品は、Farmer Lodgeの若妻Gertrudeが、Lodgeの前の女Rhoda Brookの呪いによって、左腕が萎え体力を失って行って、最後には呪いを解くために死刑囚の死体に触れ、その場で登場人物の関係がすべて明るみに出て、Gertrudeが死ぬという物語である。

全篇を貫いている‘witchcraft’を辿ってみると、「やせて衰えつつある30歳の女」Rhodaが、Lodgeの連れ帰るGertrudeの様子を息子に探らせる所から始まる。息子は「農場主の妻を底の底まで読み通すかのように直視」する。Gertrudeはその目差しを決して忘れることができない。Rhodaは息子の報告からGertrudeの姿を「写真のようにリアル」に思い描く。

この後で Rhoda は「年をとったように、ぞっとするほど歪んでしわのよった顔」の Gertrude の夢を見、夢の Gertrude を突き離すべく、右手でその左手をつかんで、ふり回して床に投げつける（‘whirled it backward to the floor’）。この ‘whirl’ という言葉はすぐ後にも、‘She looked on the floor whither she had whirled the spectre...’ と繰り返されていて、注目していただきたい。Gertrude の左腕が ‘withered’ しはじめるのは、まさにこの瞬間、もっと正確に言えば、夜中の 2 時からである。‘withered’ と受身形が使われているのも留意していいであろう。懐妊の徴候のないことも、魔術のせいと考えられる。

相談に来た Gertrude の左腕に Rhoda は自分の 4 本の指跡を認める。彼女が帰ったあと Rhoda は思いめぐらす。「おお、わたしが心ならずも人に邪悪な力を加えるなんてあり得ようか？」と。そのあとに、地の文で、Rhoda は彼女が男に捨てられたあと魔女と呼ばれてきたのを知っていた、とある。実は我々は、Rhoda が「心ならずも」(‘against my own will’) と言っているが、既に魔術をかけていたのを知る。作者は、「その冬ロッジ夫人の左腕が徐々にきかなくなってきたのは、ローダ・ブルックによって ‘overlook’ されたからだ」という噂が広まったと書いている。‘overlook’ は OED に ‘To look upon with the “evil eye”: to bewitch.’ と語義が与えられているし、*The Life of Thomas Hardy* に Hardy 自身がその実例を挙げている現象である。²

‘The Withered Arm’ では、Rhoda が直接 ‘overlook’ したのではなく、彼女の息子を通してその力を発揮したといえる。この少年にじっと見られて、‘his hard gaze never leaving her’ と Gertrude の体験が述べられているところがそうである。また、Rhoda が「夢」を見る夜の就寝前に、「彼女はその新妻のことを、残り火の上に心の目でまざまざと見えるほどに集中して瞑想した」と書かれている。これはまさに魔術を施すことなのである。ただ彼女は ‘against my own will’ といっているのも、意識していないだけのことである。深夜の出来事が夢か現実か区別がつかないように書かれているのも、魔術の結果だからである。

Conjuror Trendle がコップの水に卵を流し込んで Gertrude に「敵」を見せるやり方も、典型的な魔術の一つである。Rhoda と息子が去った後も、腕の萎えは止まらず、二度目に訪れた Gertrude に Trendle が示す「血を変え、体質を変化させる」方法も、ゴヤの絵を見るまでもなく、典型的な呪術である。絞首索の跡も生々しい首に「呪われた腕」を十字の形になるように置いたとたん、「血の変化」(‘the turn of the blood’) がおこる。しかし、「血が

あまりにも変った」(‘Her blood had been “turned” indeed—too far.’) ため、彼女は死ぬ。

われわれは、ここに witchcraft を使った Hardy の美事な人間描写を見る。酪農の日常生活を中心とした共同体、その境界線上に住んでいる Rhoda 親子、共同社会から全く離れた、エグドンの真中(‘In the heart of Egdon’)に住んでいる Trendle の位置から、魔術の社会での位置がわかる。そして、それは同時に人々の心理的位置を示していて、最初共同体の真中にいた Gertrude が、しまいには少年の死刑をも渴望してしまって、Rhoda が夢にみた ‘witch’ そのものになって行くとき、Gertrude はコミュニティから最も遠い死刑場に位置することになる。

以上の Hardy の呪術の概観図をもって、他の作品を見ると、別の世界が現われてくる。

‘The Withered Arm’ で、‘whirl’ という言葉に注意を喚起した。‘whirl’ は、Hardy の呪術世界でのキー・ワードの一つだと思う。‘On the Western Circuit’ で、Edith Harnham は、洗練された Charles Raye がどうして何の取柄もない Anna に惹かれたのかと、二度自問している。どうして知りあったのか、ということも入れれば、4度も心の中で問いかけている。そして問いかけの最後で作者は、「この女主人はアナと同様、世紀末青年(‘the end-of-the age young man’)に慣れていなかった。そうでなければ、そんなにいぶかることもなかったであろう」と申しそえている。Angel Clare に似たこの世紀末青年は、確かに「自然の子」(‘child of nature’)に惹かれるが、私は決定的に直接的に Anna に彼がのめり込むのは、‘whirligig’ 即ち回転木馬のためだと思う。大伽藍にはねかえる喧噪の方角には「青い物凄い光が宙にうかんでいた。... 人々の運動は非常に規則正しいので機械で動かされているように見えた。果せるかな実際彼らが機械で動かされていることがまもなく明瞭となった」と作者は書いている。この機械こそ、蒸気で動くメリーゴーランドであり、鏡がナフサの光と人々の姿をきらきらと映し出している。その回る人影(‘the revolving figures’)の一つが Anna だったのである。「彼女の顔は恍惚として夢見るように酔いしれている」。「彼はこれほど美しい自然の造りものを見たことがなかった。回って来るたびに彼女は彼の情緒に深くくい入った」と書かれている。暗がりの中で強烈な光に照らされ、ぐるぐる回るものを見せること、これは明らかに催眠術である。そしてそれは、‘evil eye’ で ‘look upon’ することと共通のことなのである。「気前よく彼が金を出した

ので女は再び回り ('whirl') つづけた」。その結果は明らかであろう。

しかし、ここまでなら Dickens もしていることである。³ Hardy をより現代的にしているのは、古典文学や神話の重層的な活用である。'On the Western Circuit'で、「その場の光景は色と焰とについて言えば地獄の第八坑 ('the eighth chasm of the Inferno') であり、陽気さからいえば、ホメーロスの天界に似ている」と書かれている。Hardy は Thomas Carlyle の弟 John Carlyle の原典対訳版で、ダンテの「地獄篇」を読んでいた。その裏表紙見返しに、地獄の断面図を自らの手で書き込んでいる。⁴ ここにいう 'the eighth chasm of the Inferno' というのは、第八サークルの第八坑のことである。それには Carlyle の訳で 'The Evil Counsellors' (邪まな謀りごとをめぐらすものたち) という名称が与えられている。Carlyle の訳では、'with flames thus numerous the eighth chasm was all gleaming...' (かくして数多き炎に第八坑はあまねく燃えみたり) とあり、'... and every flame steals a sinner.' (一つ一つの炎はそれぞれに罪人を盗めり) と続いている。つまり我々は、頭初から「地獄」の最深部に属する「第八坑」という魔の輪の中に登場人物たちが蠢めいているのを知る。そして、焰の一つ一つに邪まな謀りごとをしたものが入っているということによって、登場人物たちは、Edith も Anna できさえも、そして彼らに呼応する Raye も、邪まな謀りごとをした結果、地獄の業火に包まれることが決定づけられていることを知るのである。

'On the Western Circuit' で、'imaginative' という語が2度出てくる。最初は Charles Raye の性質について、「手紙が来たという事実だけで空想に走りやすい彼の情緒 ('his imaginative sentiment') を満足させるに充分であった」とかかかれている所であり、二回目は、Edith について、「彼女はひそかに、微妙で空想的なものではあるが ('subtle and imaginative truly'), 心を奪われそうな強い愛着をその男にいだいた」とある所である。確かに Edith Harnham は 'An Imaginative Woman' の Ella Marchimill の別名かと思わせるほどである。

'An Imaginative Woman' の Ella も、銃砲製造をなりわいとする夫とうまく行っていない。この作品も Hardy 的な呪術を秘めた短篇である。Rhoda が Gertrude の似姿を息子の報告から得て、写真ほどに本人に近いイメージをもつことが出来たのに対し、Ella は Robert Trewe の人柄を大家の Mrs Hooper の話から会得してゆく。Trewe の部屋に住み、Trewe のレインコートと防水帽を身につけて、エリヤの外套だと言って、Trewe に同化しようと

する。Mrs. Hooper から彼の外貌も聞き、最後には Trewe の写真を手に入れる。その写真との初めての接見は、「静寂とローソクの灯と外の厳粛な海と星辰で更にロマンティックな色合」を付け、余分な肌着をぬいで化粧着をまとい、Trewe の最も優しい詩を数頁読んだ上でなされるのである。

Ella murmured in her lowest, richest, tenderest tone: 'And it's you who've so cruelly eclipsed me these many times!'

As she gazed long at the portrait she fell into thought, till her eyes filled with tears, and she touched the cardboard with her lips. Then she laughed with a nervous lightness, and wiped her eyes.⁵

この光景はまさに黒ミサの一種である。「(壁にかかれた) 最もささやかな語句でさえも、力と優しさにあふれ、心うちふるわすものであったので、ほんとうに詩人の息があたたかく愛しく四方の壁から彼女の頬に吹きつけられるようであった」と、Ella は感じる。ミサによって詩人の魂が降臨したのを読者は知るのである。彼女のミサはまだ続く。

And now her hair was dragging where his arm had lain when he secured the fugitive fancies; she was sleeping on a poet's lips, immersed in the very essence of him, permeated by his spirit as by an ether.⁶

夫が帰ってくるのはこの時である。彼女にかがみこみ、キスしていう、「今夜はおまえと過したかったのだよ。」作品では、それに続く夫婦の交わりについてはかかれていないが、翌朝、夫が砕けた Trewe の写真を見つける。二人は Trewe の写真の上で交わったのである。この時妊娠した子供は、「よく知られているが説明の出来ない自然のいたずらによって、子供の顔には、エラが一度も会わなかったあの男との類似がきわめてはっきりとあらわれていた。詩人の顔にあった夢みるようなきわだった表情が、転移したアイデアのように ('as the transmitted idea') 子供の顔に現われ、髪も同じ色だった」のである。これが Ella が無意識にしてしまった呪術の結果であった。

この交わりのすぐあと、Ella はソーレント海峡 (The Solent) を渡って、ワイト島 (Isle of Wight) へ Trewe に会いに行く。私は、この渡りの背後に、Tennyson の絶唱 'Crossing the Bar' の存在を感じる。1889年10月、ソー

レントを渡ったときに作られたこの詩が、1894年に出た‘An Imaginative Woman’の発想にある種の影響を及ぼしたと考えるのは自然なことであろう。ただ Tennyson の詩は、‘I hope to see my Pilot face to face/When I have crost the bar.’で終わっているが、Ella は遂に彼女の Pilot に会えなかった所が大きな違いである。Tennyson は、この‘Pilot’を‘that Divine and Unseen who is always guiding us’と自ら説明している。⁷ Ella が知らずに帰依してしまったものと Tennyson の神との違いから必然的な結果といえるであろう。

Hardy の短篇で最大の問題作といえば、‘Barbara of the House of Grebe’ではないだろうか。その題からして、*Tess of the d’Urbervilles* と親近性のある作品である。わが大谷崎と T. S. Eliot が注目したこの作品を呪術の視点から考えてみたい。

Barbara も、Tess と同じく、Sir John と呼ばれている無能な父をもち、貴族の娘である。彼女にも Tess の Angel にあたる Edmond Willowes と、Alec にあたる Lord Uplandtowers の二人の男性がいる。二人の女の決定的に違う所は、‘consistency’であろうと思う。ブラジルから帰ってきた Angel に対する Tess の反応はこのようにかかっている。

Worn and unhandsome as he had become, it was plain that she did not discern the least fault in his appearance. To her he was, as of old, all that was perfection, personally and mentally. He was still her Antinous, her Apollo even. . . .⁸

これに対して、もっと高貴な行ないで火傷を負った夫を迎えた Barbara は「床に沈みこんで、目をおおって」しまう。「バーバラ、自分で判断しなさい。君のアドーニス^{アドーニス}は、君のかけがえのない男は、こんな様になってしまったんだ！」と夫が言うのに対して、Barbara は立ちすくむだけである。「彼女の愛しさと憐れみという自然の情けは一種のパニックで（‘by a sort of panic’）一掃されてしまった」と作者は書く。後に、Willowes の彫刻をみて Uplandtowers が ‘Phoebus-Apollo’ と評するように、Willowes と Angel はある点で同じ位置にあったことがわかる。この Barbara の inconsistency は、最終的には Uplandtowers への絶対的依存につながって行くが、我々はここに秘儀的なものが大きくかかわっていることに気がつく。

名前は呪術において大きなファクターである。Barbara と Edmond が住むことになっている新居が Yewsholt (イチイの木立) と名付けられ、Edmond の姓が Willowes であることから、二人の結婚生活は葬られるべく定められているのがわかる。やがて、Edmond は死んだものとして、Barbara と Uplandtowers が結婚する。呪術が本格的に始まるのはそれからである。

Edmond の死の確かな知らせが来てから数週間して、Edmond の等身大の大理石像が送られてくる。‘Phoebus-Apollo’ と Uplandtowers がコメントしたものである。夫のいうことも耳に入らず、トランス状態で見入っている Barbara について作者は書く：「不具になったウィローズの姿は彼女の心の目から消えてしまっていた。のちのみじめな姿ではなく、この完全なものこそ彼女が愛した人であった。それは、あんなひどい仕打ちをせずに、優しい誠の心があれば、いつも見えた筈のものであった」。ここでも Hardy は Tess に使った ‘perfect’ という言葉を用いている。これに対し、Uplandtowers は、「朝まで拝んでるつもりか (‘worshipping him’)」という。‘worship’ という表現が彼女の状態をよく伝えている。伯爵がいない時に彼女は自室に ‘tabernacle’ (聖像安置所) を作り、そこに Willowes の像を安置する。夫が彼女に「沈黙の恍惚」「抑えた至福」を認めるのはそれからである。夜な夜な寝室をぬけ出す妻のあとをつけて、遂にその現場を目撃する。

Arrived at the door of the boudoir, he beheld the door of the private recess open, and Barbara within it, standing with her arms clasped tightly round the neck of her Edmond, and her mouth on his. The shawl which she had thrown round her nightclothes had slipped from her shoulders, and her long white robe and pale face lent her the blanched appearance of a second statue embracing the first. Between her kisses, she apostrophized it in a low murmur of infantine tenderness :

‘My only love—how could I be so cruel to you, my perfect one—so good and true—I am ever faithful to you, despite my seeming infidelity! . . .’⁹

これは、ローソクのあかりの中で、夜着をきて Trewe の写真にやさしく囁き、口づけをして恍惚となった、Ella Marchmill の姿を彷彿とさせる。すすり泣き、涙を流している二人の女は、みちたりた交わりの歓喜にひたってい

るかにみえる。BarbaraもEllaと同様、知らずのうちに、一種の黒ミサを行っていたと考えられる。¹⁰

鼻と耳をそぎ、唇さえもかきとったWillowesの像をみて、一度は崩れたBarbaraに、Uplandtowersは追いうちをかける。今度は夫婦の寝室に「小さな宮」(‘a little shrine’)を作る。それは背の高い黒い衣裳箆笥(‘a tall dark wardrobe’)で、いやがるBarbaraに、ローソクで照らされた像を三晩にわたって見せる。不思議なことに、これに対しBarbaraは‘the strange fascination’, ‘the horrid fascination’を感じるが、三日目の夜に突然笑って完全に崩壊し、以後Uplandtowersに奴隷的につきまとい、9年間に11人の子供を生むのである。

Uplandtowersのしたことは、もはやまごうかたなく黒ミサである。後に庭から大理石像の破片が出たとき、考古学者たちはそれをローマのサテュロスか、でなければ、「死」の寓意的な像だろうと推測する。

ならば、始めBarbaraはApolloないしAdonisを礼拝していたのが、後に、Uplandtowersによって変えられたSatyrを拝んだことになる。Pennethorne Hughesはその著*Witchcraft*で、「古典時代のサテュロスと旧石器時代の角ある神を結合し、ゴシック風の潤色を加えて具像化されたものこそ悪魔の姿である。それはまた、中世の魔女の夜宴で崇拜者の前に姿を現わした魔女の神と合致するものでもあった。」と述べている。¹¹ サテュロスはファウヌスやパンと混同されることもしばしばであった。Barbaraが拝まされたのが何であったか自明である。初めて、傷んだWillowesの顔をみたとき、「一種のパニックによって、やさしい情けの全てが一掃されてしまった」と作者がことさら‘panic’なる言葉を使っているのも、この線からみると偶然ではないように思える。

‘Barbara of the House of Grebe’を扱った以上、本論の視点からも、T. S. Eliotと谷崎潤一郎を無視して通過するわけには行かない。

Eliotは、*After Strange Gods*で、「‘Barbara of the House of Grebe’では我々は純粋な悪の世界(‘a world of pure Evil’)に引き込まれます。この物語はある種の病的な情緒(‘some morbid emotion’)に満足を与える為にのみ書かれたように思われます」と言っている。¹² Eliotは‘Evil’で何を意味したのであろうか。この作品を読むようにというだけで、説明はしない。ただ、コンテクストから推測は出来る。序文でも述べているが、EliotはHardyを論じた第三講を、「<瀆神>(‘Blasphemy’)の歴史及び現代世界におけるこの言葉の異常な位置は、伝統の研究者に興味深い研究課題を提供してくれると

思います」と言っている。¹³ 第三講は、現代作家にみられる ‘Blasphemy’ の研究と言っているのである。議論を進めながら Hardy に触れ、「この講演では、これまでに述べてきた同じ嘆かわしい事態の結果、現代文学に悪魔的なもの (‘the diabolic’) が浸入してきたことについて考えます」と言っている。¹⁴ となると、この ‘Evil’ は、主に宗教的コンテキストで述べられた言葉であって、サド・マゾのような単なる心理学的病理学的意味でいわれていないことがわかる。¹⁵ Hardy を槍玉にあげたあと、同じ ‘morbidness’ という罪状で挙げられるのが、D. H. Lawrence である。殊に Lawrence の第三の特徴として、‘morbidness’ という言葉を使って、「明らかに病的な性」(‘a distinct sexual morbidness’) をあげている。こうみえてくると、Eliot のいう ‘Evil’ や ‘morbid emotion’ を、これまでの Hardy 研究者にしばしば見られるように、SM的世界に限定することは間違いであることがわかる。少々乱暴ないい方であるが、この問題の鍵は、*After Strange Gods: A Primer of Modern Heresy* というタイトルにあるように思う。現代作家を列挙して Eliot が非難しているのは、彼らが「異神」(‘Strange Gods’) 即ち「悪魔的なもの」(‘the diabolic’) を造り出している点にある。そして、その最悪のものに Hardy と Lawrence を挙げているのは、一方で Eliot の爛眼を示している。確かに Hardy も Lawrence も、アングロ・キャソリシズムからみれば、許されざる「悪」を描いているからである。

谷崎と ‘Barbara of the House of Grebe’ の出会いはどうして起こったのか知らない。が、その訳は美事な英語力と日本語のセンスを示している。はっきりした誤訳は数か所しかない。その一つが、‘in the smallest hours of the morning’ を「夜明けに」と訳しているところである。¹⁶ 少々古めかしい言葉でいえば、これは「丑三つどき」と訳すべき所である。魔の時刻は、Gertrude の場合もそうであったように、夜中の2時であり、Barbara が像に会いにゆくのはその時刻であって、サテュロスに変身した像に初めて会うのも午前2時だからである。この例からも推測できるように、谷崎がこの作品の呪術性に気付いていたとはいいがたい。『春琴抄』と ‘Barbara of the House of Grebe’ の共通点は、主にSM的な場面であったことは、これまで指摘されてきた通りである。しかしそれに加えて、最も重要な共通点を示す所は、「豫期に反して、アブランドタワース伯は二度と結婚しませんでした」(谷崎訳)という語り手の言葉ではなかったかと思う。¹⁷ この一文で、‘Barbara of the House of Grebe’ はいわゆる「悪」から救われていて、『春琴抄』の語り手がいう、「されば春琴女の閉ぢた眼瞼にもそれが取り分け優しい女人であるせり

か古い繪像の觀世音を拜んだやうなほのかな慈悲を感ずるのである」という文章と深く相通じているからである。¹⁸ そしてこの点で、EliotのHardyへの非難は本質的な修正を要すると思われる。

終りに、これからの展望をのべて、この小論の結論としたい。

タイトルをHardyにおける「呪術的要素」として、「呪術」としなかったのには理由がある。‘The Withered Arm’のように、‘witchcraft’が前面に出ているのはむしろ例外であって、隠れた意匠として呪術が認められるのがHardyでは普通だからである。‘On the Western Circuit’でふれたように、深層心理とか神話とかが重なりあって、呪術が現代に再生しているところにHardyの特徴がある。

例えば、BarbaraがAdonisにたとえられるWillowesの像を礼拝するところは、Matthew Arnoldの‘Pagan and Mediæval Religious Sentiment’の影響を受けていることは明らかである。Hardyがメモをとりながら熱心に読んだこの論文には、Adonisの祭りを描いたTheocritusのイディルがArnold自身の訳で長々と引用されている。一部の引用でその証明には十分であろう。

And look, look, how charming he lies there on his silver couch, with just a soft down on his cheeks, that beloved Adonis, — Adonis, whom one loves even though he is dead!¹⁹

とはいえ、我々は、Hardyの呪術的なものを合理的に説明するのは誤りであろう。*Macbeth*の魔女を心理的現象として捉えれば劇がこわれてしまうのと同じである。その辺りの分析も含めて、Hardyの呪術性の全貌はこれからの研究にまたねばならない。

短篇の呪術性は、Hardyの詩や長篇にも顕著にみられる。Hardy全体を通してこの呪術的要素が考究され、体系化されるとき、Hardyの新しい面が見えてくるとと思われる。たとえば、Hardy—Lawrence—John Fowlesと流れる呪術性の系譜も明らかになるであろう。あるいは、T. S. Eliotが指摘した、HardyやLawrenceにおける‘Modern Heresy’の特質にも新しい光を与えてくれると思われる。

注

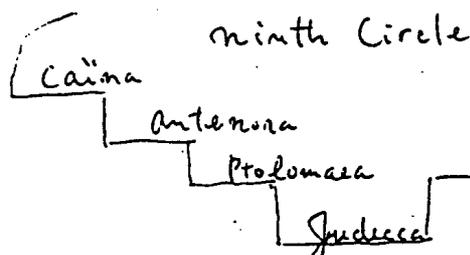
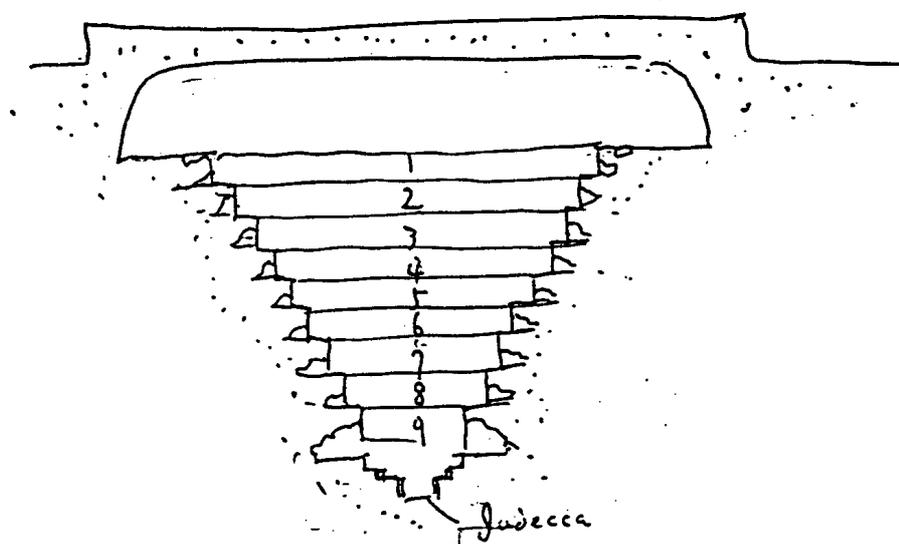
* 本稿は、日本ハーディ協会第34回大会(1991年10月19日 於帝塚山短期大学)で口頭発表したものに加筆したものである。

¹ Desmond Hawkins, *Hardy at Home: The People and Places of His Wessex* (London: Barrie and Jenkins, 1989), p. 198.

² Florence E. Hardy, *The Life of Thomas Hardy* (London: Macmillan, 1962), pp. 204-05.

³ 'evil eye'を示すものとしては、*Barnaby Rudge*のSimon Tappertitが好例である。Cf. Fred Kaplan, *Dickens and Mesmerism: The Hidden Springs of Fiction* (Princeton: Princeton U. P., 1975).

⁴ *Dante's Divine Comedy: The Inferno/A Literal Prose Translation/with/The Text of the Original Collated from the Best/Editions, and Explanatory Notes/by John A. Carlyle, M. P. (1867; London: George Bell and Sons, 1882)*. Hardyはこの本に百ヶ所近く書き入れを行ない、裏表紙のflyleafに次のような地獄図を描いている。The Trustees of the Thomas Hardy Memorial Collectionの好意によって、The Dorset County Museumの原本から私が転写したものである。



- 5 *The Short Stories of Thomas Hardy* (London: Macmillan, 1928), p. 267.
- 6 *Ibid.*, p. 268.
- 7 Christopher Ricks, ed., *The Poems of Tennyson* (London: Longmans, 1969), pp. 1458-59.
- 8 Macmillan's Pocket Edition, p. 501.
- 9 *The Short Stories of Thomas Hardy*, pp. 564-65.
- 10 Trewe の写真も, Willowes の像も, Hardy が負っているかいないかは別として, James Frazer が *The Golden Bough* の第一巻第三章 'Sympathetic Magic' で論じたもののヴァリエーションの一つである。Hardy がノートをとりながら読んだ *The Golden Bough* と Hardy の作品との関係については後に述べる。
- 11 Pennethorne Hughes, *Witchcraft* (London: Longmans, 1952), p. 91.
- 12 T. S. Eliot, *After Strange Gods: A Primer of Modern Heresy* (London: Faber and Faber, 1933), p. 58.
- 13 *Ibid.*, p. 51.
- 14 *Ibid.*, p. 56.
- 15 The Dorset County Museum に保管されている 'Reviews of Thomas Hardy's Books (Poetry)' という Hardy のスクラップ・ブックに, *Literary Digest* (New York: Mar 26, 1904) の *The Dynasts* の書評が切り抜かれている。タイトルは 'The Hardihood of Mr. Hardy/*The Dynasts* Cloth. 5×7 1/2 inch. 228pp. Price \$1, 50. Macmillan.' となっている。その書評の一文 'His conception of the "Immanent Will" is unrighteous to the degree of blasphemy.' に Hardy は赤で下線を引いている。T. S. Eliot がこの書評を読んだかどうかは別として, 当時のアメリカの Hardy 批評にこの種の論評が散見される。
- 16 『谷崎潤一郎全集』第23巻 (東京: 中央公論社, 1969), 581頁。
- 17 同掲書, 592頁。
- 18 『谷崎潤一郎全集』第13巻 (東京: 中央公論社, 1967), 499頁。
- 19 Matthew Arnold, *Essays in Criticism: First Series* (1865; rpt. London: Macmillan, 1905), p. 205.

The Occult Elements in Thomas Hardy —In the Case of His Short Stories—

My general purpose in studying the occult elements in Thomas Hardy is to throw new light on, or to, so to speak, take a series of X-rays of the structure and meaning of some of his main novels such as *Tess of the d'Urbervilles* and *The Mayor of Casterbridge*. I shall do this, after I have examined the occult (including witchcraft and myth) in his short stories and poems. The present treatise treats of his short stories to

bring out and analyse their occult elements.

'The Withered Arm' is most obviously written from within the webs of witchcraft beliefs which informs Hardy's short stories. But the important functions of the occult elements in Hardy operate at the level of hidden designs in his works. The exposed 'witchcraft' in 'The Withered Arm' works clandestinely in 'On the Western Circuit' and in 'An Imaginative Woman'. Here it effectively shows the mental states of the characters. At the same time magical power, witchcraft, or the occult gives macabre realism to Hardy's works.

A compilation of such occult elements can be found in 'Barbara of the House of Grebe', the most controversial of Hardy's short stories. The distinctive characteristic of the occult there is the regeneration of the occult in the present day overlapped by classic literature, myth, psychology, superstition, etc. The effect on the reader must be analysed in future studies.

The occult features observed in Hardy's short stories are also clearly discernible in his poems and novels. The systematization of such elements in his whole work will show a new side of Hardy. For example, the genealogy of Hardy, D. H. Lawrence and John Fowles will be elucidated with respect to the presence of the occult in their work. Such studies will also shed new light on the 'Modern Heresy' of which Hardy and Lawrence were accused by T. S. Eliot in his *After Strange Gods*.